

大学史をつくる—沿革史編纂必携—

寺崎昌男・別府昭郎・中野実編著

東京 東信堂 1999.6

432p 21cm 5,000円

評者はここ五年ほど大学史編纂に関わっている。仕事を始めた当初、それまで日本近現代史を専攻していたが大学の歴史に興味をもったことはなく、年史編纂の手順や関連資料

についての基礎知識はもちろん、「学校法人」という言葉さえ知らなかった。大学史編纂を経験した人も周囲になく茫然としていたところ、本書にも収録されている「大学史編纂と資料の保存—現状と課題—」(澤木武美・鈴木秀幸・中野実・日露野好章・松崎彰、初出『記録と史料』第3号)を勧められて読み、大学史の仕事とは何かをようやくイメージすることができた。以来編纂室の設置に始まり、編纂委員会の組織と運営、事業計画の立案、予算要求、資料の調査・収集・整理、聞き取り、執筆・校閲・編集などといった仕事は一通り経験した。七転八倒し続け、苦い思い出ばかりである。

本書は、「沿革史編纂についてこれまで蓄積された技法や方法を、広く見渡し、確かめ、共有することはできないだろうか。また、教員、職員、理事者などが大学史をつくろうとする時、その最初の段階でつまずいたり迷ったりする労苦を少しでもやわらげることはできないか」(「はしがき」というねらいのもとに編集された。これまで大学史編纂や関係資料の保存、あるいは大学史研究に携わってきた31名による、41本の文章が集められている。構成は「Ⅰ 大学史編纂の動向」「Ⅱ 大学史編纂の体験を語る」「Ⅲ 大学図書館と創設への提言」「Ⅳ 外国の大学図書館」「Ⅴ 実践編：実践案内—編纂のためのQ&A」の5部となっている。

Ⅰは、日本における大学史研究および年史編纂の成果と現状について、寺崎昌男氏が論じた3本と、ドイツ・イギリス・中国での大学史編纂の実情を報告した3本で構成される。Ⅱでは、私立6大学・国立4大学の年史編纂担当者が、編纂にあたっての理念や業務の要点、実務のなかでの経験などを記している。戦後の大学史の先駆的存在として後に大きな影響を与えたといえる『東北大学五十年史』(1960年)を執筆者した原田隆吉氏の「大学史編纂の体験」は、今なお多くの示唆を与えてくれる。執筆編集にあたっての具体的な手順や留意点については、中野実氏の『東

京大学百年史』編纂の過程」が詳しい。

Ⅲの「展望」には、先に紹介した「大学史編纂と資料の保存」を含む、大学図書館の理念と目標を示す3本が、「論考」には大学図書館の設置を求める発言が収録されている。「提言」には、私立4・国立の4大学で、大学史資料の保存措置について理事会などに向けて提出された文書が収録されている。どの大学でも、年史の刊行が終了する前後には、必ず「集めた資料をどう残していくか」が問題となる。今後情報公開法の施行なども相俟って、多くの大学で学内文書の整理・保存・公開利用が検討されるだろう。大学によって事情はまちまちであろうが、Ⅲに収められた諸論考は、そうした問題の解決に向けての具体的な指針を与える内容である。

Ⅳでは、ドイツ・イタリア・ポルトガル・アメリカの大学アーカイヴズの実態が報告されている。評者の認識不足かもしれないが、海外の大学アーカイヴズにおいて二〇世紀以降の記録がどのように保存管理されているか、あるいは現用の記録がどのような過程を経て歴史資料として保存されるまでになるかを、具体的に知りたいところである。

Ⅴは、これから大学史編纂に関わろうとする人に向けたガイドで、関連資料の収集にあたって動き方や、学外機関の利用、参考文献の紹介などが行われている。年史編纂には、必ずといって良いほど時間上・予算上(特に人件費上の)の制約が課せられる。そこで執筆編集の前段となる資料の収集や整理といった作業は、できるだけ効率的にすすめなければならない。当初何から手をつけてよいかわからず、思いついた企画も多くが中途半端に終わった評者の経験からすれば、ここでは的確な情報が提供されている。欲を言えば、編纂委員会や、実際に資料収集・執筆作業を行う委員会をどう組織するかなど、編纂体制のあり方について触れてほしかった。また、編纂刊行物の形態としては、通史編・部局史編・資料編・写真集などが考えられる。それぞれの刊行物を編集する際の留意点などを示

してもらえるとさらに役に立つだろう。

Iに収録されている寺崎昌男氏の「大学アーカイヴズとはなにか」が発表された一九八三年において、「ヨーロッパ、アメリカを通じて、今日では、アーカイヴズをおかない大学はほとんどない」のに対し、日本に大学アーカイヴズとよべる施設はほとんど存在しなかった。その後国立では『東京大学百年史』『九州大学七十五年史』『名古屋大学五十年史』『京都大学百年史』、私立では『早稲田大学百年史』『明治大学百年史』『東洋大学百年史』『関西大学百年史』『関西学院百年史』といった、大規模な年史の刊行が続いた。あわせて大学史の資料集や研究紀要が活発に刊行され、大学の沿革をビジュアルに伝える写真集も、有効な広報手段として編集に工夫が凝らされるようになった。さらに編集事業の多様化にともない、年史刊行のために臨時的におかれた編集室が、恒常的な資料室に改組されていった。単なる顕彰や記念品に終わらない資料にもとづいた内容の刊行物を編集すること、また刊行後においても資料収集・保存体制を維持していくことが、日本の大学においても定着しつつある。

1999（平成11）年は、新制大学が発足して50年目にあたり、国公立大学を中心に五十年史編集が評者の知る限りでは25以上の大学で行われている。これまで旧帝大や伝統ある私立大学を中心に行われてきた編集事業および資料保存は、より多くの大学で、さまざまな視点によって行われるようになった。評者の所属する大学のような規模の大学では、理想的な年史編集および資料保存は実のところ難しい。しかし中小規模の大学でも、大規模な大学と同じことはできないにしても、それなりの措置がとられることが今後必要であろう。

大学史に限らず、自治体史や社史などを編集しようとする人間は、まず関係資料を収集し、資料に即した内容の書物をつくらうとする。そして集めた資料は、散逸しないように保存しようとする。しかし、その当たり前な

ことを大学という組織で続けることが、これまでいかに難しかったかも、本書に収録された証言で知ることができる。編集当事者の意図が継続されずに、収集した史料が編集事業終了後に死蔵あるいは散逸してしまったケースは数多い。近年、資料保存に対する認識が深まってきたとは言え、過ちを繰り返さない保証はないのである。

そうした過ちを繰り返さないためには、なるべく多くの大学関係者—教職員や経営者だけでなく、学生や卒業生も含む—に、大学史編集及び関係資料保存の意義を理解してもらうことが必要である。本書のサブタイトルには、“Editor's Handbook for University History”と記されており、評者のような立場の人間には必携の書であることは言うまでもない。編者は「読者が多いとは思われない」と断っているが、より多くの人に読まれてほしい内容を持っている。『記録と史料』を普段手に取らないような人にどれだけ読まれるかが、本書刊行の意義をうらなうだろう。

桑尾光太郎・学習院大学